

「新しい東北」-作文コンテスト-

高校生の部 入賞作文

高校生の部 優秀賞

34 「新しい東北を目指して」

福島県 小椋汐里「高校2年生」

36 「悲しみの力」

宮城県 佐々木風美「高校1年生」

38 「幸せへ導く復興」

岩手県 佐々木尚美「高校3年生」

高校生の部 入選

| | | | |
|----|------------------------|---------|--------------|
| 40 | 「1つでも多くの笑顔を作るために。」 | 岡山県 | 中原亜乃「高校1年生」 |
| 40 | 「被災地のグローバル化」 | アメリカ合衆国 | 樹神真美子「高校2年生」 |
| 40 | 「震災から生まれた新しいつながり」 | 宮城県 | 青木純菜「高校3年生」 |
| 41 | 「『復興』から見える、私たちの東北」 | 岩手県 | 阿部華帆「高校3年生」 |
| 42 | 「被災地宮城から考える。故郷の今とこれから」 | 宮城県 | 太田直希「高校3年生」 |
| 42 | 「笑顔で繋がる新しい東北」 | 徳島県 | 岡澤亜由奈「高校3年生」 |
| 42 | 「未来の東北」 | 岩手県 | 小野紗友梨「高校3年生」 |
| 43 | 「これからの東北のために」 | 福島県 | 楠木透也「高校3年生」 |
| 43 | 「問う&訪う&to東北！」 | 秋田県 | 後藤ゆうひ「高校3年生」 |
| 44 | 「本当に求めていること」 | 愛知県 | 野沢若那「高校3年生」 |
| 44 | 「私たちが考える『新しい東北』の姿」 | 福島県 | 早川真由子「高校3年生」 |
| 44 | 「私たちにできること」 | 福島県 | 松枝未佳「高校3年生」 |
| 45 | 「私たちにできる復興」 | 福島県 | 宗像樹「高校3年生」 |
| 45 | 「元気な日本を取り戻すために」 | 福島県 | 箭内鈴佳「高校3年生」 |
| 45 | 「新しい東北」 | 福島県 | 渡辺希和「高校3年生」 |

高 校 生 の 部 総 評

高校生の部には、

1,000作品近くの応募がありました。

高校生になると、文章力の高さもさることながら、被災地をはじめ現代の社会が抱えている、

エネルギー問題や福祉の問題、

地域のコミュニティが

解決していかなくてはならない課題などを

しっかりと認識し、それらの課題解決のために

それぞれにできること、

やりたいことをしっかりと描いていました。

審査は議論が白熱しましたが、

東北の復興に対して自分なりに係われることを

リアルに描いた3作品が優秀作品に選ばれました。

優秀作品以外にも、

ピュアな感性や熱い思いが感じられる作品が多く、

そうした思いをいつまでも持ち続け、

新しい東北、新しい日本づくりに活かして欲しいと願います。

「新しい東北を目指して」

福島県 小椋 汐里 「高校2年生」

震災当時私は小学六年生だった。揺れを感じたのは教室で、クラスメートと共に卒業制作をしていた時のことだった。地元の普通小学校に通っていた私はクラスの副委員長をしていたのだが、両眼とも全く視力がなかったため、本やランドセルの散らばった教室の中を友達に手を引いてもらいながら校庭へ避難した。外へ出た後、学級委員として全員の無事を確認しなければならなかった私は、目で見て数えることはできなかつたので、前から順に番号を言ってもらおうという方法をとって、みなが無事に避難したことを確かめた。揺れが収まると、私たちは校舎内に戻ったのだが、停電が続いている教室内は暗く、低学年の何人かの子どもたちは、地震の揺れと暗さに怯えて泣いていた。丁度その日私は、暗くても指で触読できる点字の本を持っていて、そんな子どもたちに読み聞かせをすることができたのだ。

私たち視覚障がい者は、いつも人から助けをもらうことばかりだが、このときは私にもできることがあることを知り、とてもうれしかった。震災は確かに辛い経験だったが、私にとっては仲間と助け合うことの大切さを再確認することのできた大切な経験でもあったのだ。

本当に大変だったのは、「その後」かもしれない。津波で多くの貴い命が奪われ、原発事故による放射線の影響により故郷を追われた人たちの苦難は今でも続いている。

私たちは用意していたタイムカプセルを地中に埋めることもできず、地震から一週間後の卒業式には全員がそろうことはなかった。

中学校は、視覚障がいのある私にとって、より配慮された専門的な学習ができることを期待して盲学校中学部に入學した。しかし、会津よりも空間放射線量の高い福島市内に引越した私は、体育や校外学習など、外での活動が制限され、目標としていた白杖での単独歩行の練習はしばらくできなかった。

そんな震災からもう五年が経った。今では白杖を使って一人で登下校ができるようになった。しかし完全に震災前の元通りの環境に戻ったのかと考えると、

疑問が残る。未だに風評被害が続いているようにも思えるし、実際私の家でもまだ福島の野菜は買っていない。

もちろん福島や東北では復興に向けた取り組みは行っている。例えば福島では震災後に避難してしまつた親子が戻ってくるためにも、政府が打ち切つた十八歳以下の医療費免除を県独自に続けている。安心して子育てできる「福島モデル」を目指して。元々福島県の出生率は全国平均を上回つていたのでから、三世代同居やご近所づきあいのコミュニティがしっかりしていたわけだ。

また、再生可能エネルギーも注目されている。震災前、二酸化炭素を放出しない環境にやさしい発電方法として喧伝されていた原子力発電だったが、地震・津波による放射線の問題が発生してから、豊かな自然エネルギーがあることに気付かされた。只見の小水力発電や湖南町布引高原の風力発電、相馬沖洋上風力発電、次々聞かれる国内最大のメガソーラー、土湯温泉などに代表される地熱発電、それを観光とタイアップさせようと地元の高校生達も活動している。

このような温室効果ガスを出さない、再生可能エネルギーを活用すべく、福島県内に産学連携の研究機関が誕生しているとニュースでも聞いている。

以前被災地の高校生として南フランスに派遣された時、現地で震災当時から今までの状況を伝えるスピーチをさせていただいた。そのときの反応は色々あったが、もう完全に復興したと思つていた方もいれば、未だに放射線の影響があり、福島県内には誰一人立ち入れないと思つている方もいた。飛行機で十二時間という遠く離れた場所で誤解があるのは仕方ないことだが、事実を知ってもらふことができて本当によかつたと思う。「教えてくれてありがとう」とも言われた。

戦後七十年が経ち、被爆者も高齢化し、戦争という過ちを繰り返してはいけないという遺族の思いも風化してきていると言われるが、原発事故についても同じことがいえるのではないだろうか。今の私たちにできることは、現実と向き合い、正しい情報を発信して、できるだけ多くの人に事実を知ってもらふこと、そうすることで同じ過ちの繰り返しを避けることだと考える。

「悲しみの力」

宮城県 佐々木 風美 「高校1年生」

不思議な気持ちになる。私の家から臨む太平洋は、美しく静かだ。毎日のように、あたり前に見下ろすその風景。何日も黒煙をあげていた沿岸部や、なぎたおされた木々は、まるで遠い過去のようだ。

私自身、五年前の震災について、友人や家族と話をすることは少なくなった。毎日が、静かに過ぎていく。

だから、「私たちにできる復興」を考えたとき、戸惑ってしまった。私は、直接家族を失ったり、大きな被害を受けたりしたわけではないからだ。でも、よく考えてみると、決して忘れたわけでも、心が傷つかなかったわけでもない。経験したこともない地震の恐ろしかったこと。大切な人を失ったたくさんの人々を真近で見苦しかったこと。原発の事故に不安で震えたこと……。故郷を去らなければならなかった人々の姿の切なさ。心の傷みは確かに、しっかりと心に残されている。そしてそれは、皆同じなのだと思う。傷の重さ、は様々だけれど。

でも私たち、東北に住む人は、思いを言葉にするのが苦手だ。黙って、思いを心の中に抱えて生きているから、こんなにも毎日が静かなのだ。言いかえれば、静けさはそれだけ心が傷ついているということなのだと思う。そして、その傷みをそつと持っているから、傷ついた人ほど優しいのだ。悲しみは時が経っても決して消えることはない。けれど私たち東北の人間は、悲しみを少しずつ優しさに変えて生きている。

だから、私は思う。私たちにできる復興は、一人一人の「悲しさを大切にして生きる」という日常を、きちんと形にしていこうことではないだろうか。そのために、まずは一人一人が思いを言葉にしていくことだ。言葉は、誰もが手にしている。話すことは、とてもエネルギーがいることだし、支えてくれる人がいないと難しいことでもある。でも、それを物語にしていくなのだ。形にして、初めて気付けることも多いし、その道すじの中で、自分の抱える悲しみに、丁寧に向き合えるはずだから。それが、家族や学校、社会という単位が集まった時、大きな物語となって私たちに励まし、支えてくれるはずだ。「悲しみ」が形を変えて「力」となり、やがて「誇り」になっていったら、どんなに大きな救いになるだろう。大切なのは、自分の

物語を、主人公として生きていることに気付くことでもあると思う。

そして、そこから私たちの大きな役割だ。私たち子供が、世界に飛び出して伝えていく。たくさんの国の、それぞれの言葉で、私たちの物語を伝えていくのだ。

東北は美しい。山も川も海も。山の幸も海の幸もたくさんある。そして負けないくらい人の心が温かい。だから自信を持って伝えよう。「私たちは、悲しみを大切に生きています。そして負けません。東北の奇跡を見にきて下さい」と。

そうすればきっと、海に眠る、たくさんの命が輝きだすはずだ。

言葉を拾い、物語に紡ぐ。そして私たちが世界に伝える。それが私の考える復興だ。

「幸せへ導く復興」

岩手県 佐々木 尚美 「高校3年生」

最初に思い出すのは満開の桜道。

「この桜はね、昔おじいちゃんが植えた人だよ。」

祖母の畑の手伝いをしながら、祖父が植えたという畑を囲む桜の道を私はよく歩いた。祖母は花が刺繍された白い帽子を被っていて、私は大事に使い古した赤いランドセルを背負っている。ある日、幸せとは何かと聞いた私に祖母は、

「あなたと一緒にお菓子を食えること。休みの日は家族みんなで温泉に行くこと。素敵でしょ。」

そう言っって目を細めて笑った。うららかな春の日差し、降る桜の花びら。周りには黄色の菜の花や桃色の野ばらが咲き乱れていた。ずっとこんな幸せな春が続くようにと願っていた。

それからたった一年後の三月十一日、雪がちらつく寒い日だった。津波は町のかなにもかもを呑み込んでしまった。そして大好きだった祖母と祖父も私の手の届かない遠い場所へと流されていった。私は避難所の高校で友達と一緒に親の迎えを待った。家族の安否が分からず、もしかしたら自分は独りにだけ取り残されてしまったのではないかという恐怖に襲われた。次の日、母は私を迎えに来た。そして私を見つけると、ゆっくりと近づいて強く抱きしめた。残された家族は私と母の二人だった。

震災当初、私を含めたみんなが気持ちの整理に苦しんだ。私は避難先を転々としながら、この場所を出たら次はどこに行くのかと不安な日々を過ごした。しかし、多くのボランティアの方々から様々な支援があり、いろんな方と交流を重ねることで、世界中の絆を感じて少しずつ立ち直ってきた。そして今、あの東日本大震災から五年の月日が経った。しかし、私の町の復興は遅れている。理由は様々だが、とても難しい問題がある。それは、震災で多くの方が犠牲になった旧役場庁舎の解体をめぐったものだ。この建物は、あの日の姿のまま残されている。保存派の理由は、「風化させたくない」、「忘れないため」というものだ。確かに津波の恐ろしさを伝え続けていくために、重要なものかもしれない。その一方で、保存を反対する意見も多くある。それは、「見るのが辛い」、「維持費が

かかる」というものだ。町民の中には旧庁舎を見ることができず、その前を通ることができない方も少なくない。現在、この保存か解体かの議論は平行線という状態だ。このままでは、どちらに決まったとしても手放しでは喜ぶことはできないと思う。また、最近再び被災地の復興の現状をメディアが大々的に取り上げるようになった。自分の住む町の状況をよく理解できていない人も少なくなく、現実を知り、小さな町はまた不安や憤りというさまざまな気持ちで揺れている。

復興と向き合うことで、町民の思考は様々だと思う。旧庁舎以外でも問題はまだまだたくさんある。私はみんなが安心して暮らせる町とはどのようなものか考えた。私は自然と母の事を想った。母は未だに失った家族への罪悪感と戦っている。こうした罪悪感で自分を責め、苦しんでいる人は多い。そこで、私はみんなが幸せに安心して暮らすためには、町にあの日の痛みは必要なのではないかと考えた。ただ、あの日の記憶を忘れるというのではなく、今を生きている人が希望を持ち、前を向いて歩いていかなければ本当の復興とは言えないと思ったのである。誰もみな、あの震災を忘れることはしないだろう。むしろできないくらいなのだ。語り継ぐことはとても大切だ。だが、苦しみをこれからも背負うことはしなくていい。まずは、乗り越えようという勇氣が必要だ。そのために、私は、学校で復興研究会というメンバーに所属し、町づくりに参加する道を探っている。私は、私たちが何かできることを考えて行動におこすことで、その存在に確かに少なからず勇氣をもらっている人がいるという事をこれからもっと伝えていけたらと思う。

「一つでも多くの笑顔をつくるために。」

岡山県 中原 亜乃「高校1年生」

二〇一一年三月十一日、当時私は小学四年生だった。そしてその日は私の誕生日である。普通に学校に行き、夕方、ルンルンとした気分でお家に帰った。その日ニュースは見なかった。平和な一日だった。次の日、学校は土曜日で休みだった。昼前くらいに起き、テレビを見る。そこでようやく、昨日東北の方で地震があったことを知った。どのニュース番組を選択しても地震の内容で、私が生まれてからこれまで、一番ひどい地震であったことを理解した。それからのテレビといえば、救助だの、復興だの、決して良い内容とは言えず、私自身暗い気持ちになった。私が誕生日で喜んでる間に、同じ日本ではこんなことが起こっていたなんて。「三・一一」という表記に親近感がわき、同時に幼いながらも、なぜか罪悪感というものを感じていた。当時、小学生だった私は、何もできないと思っていた。何もできなかった。何ができるのかわからなかった。いや、もしかしたら自分は子どもだから、なんて自分の中で無意識に言い訳していたのかもしれない。いつの間にか中学生になり、勉強も忙しくなった。少し考えが大人になった私は、ネットで私にどんなことができるのか調べてみた。私は驚いた。私にもできることがたくさんあるではないかと。それはどのようなものかという点、募金の呼びかけ、東北の子どもたちと遊ぶボランティア活動など、私たちが子どもにもできることが多かった。こんなものがあるならもっと早く知りたかった！ボランティア活動を知った年の夏休み、早速活動に参加した。福島の子どもたちと遊ぶというもので、私にとって初めてのボランティア活動であった。私は四日間ほど参加したが、この活動によって知ったことがたくさんある。あの地震がどれほど辛いものだったか、どんな光景を見てきたか。私がそれを文に表すと、全く現実味の無いものになるのだが、あの幼い子どもたちの目は、なんとも言えない力強さがみなぎっていたと言えよう。遊んでいる間の子どもたちの目は、心から楽しんでるに違いないものだった。まるで、あの地震を経験していない、私たちと同じ顔であった。その顔を見た時、私には心に傷を抱えた子どもたちを少しでも楽にさせてあげることができるだと悟った。子どもだから何もできない、そんなものは言い訳にしかならず、子どもだからこそできることがたくさんあるのではないかと思う。直接、復興の役に立つことはできなくても、誰でも影で支えてあげる存在になれる。笑顔を増やすことができる。初めてのボランティアに参加して三年が経ち、今、私は高校生になった。確かに小学生の時よりも、中学生の時、中学生の時よりも高校生の今、勉強はとて忙しなものとなった。しかし、毎年一回は必ずボランティアに参加することは心に決めていた。この前、募金呼びかけのボランティアに応募したところだ。私にはボランティアに参加するたび、思うことがあるのだ。それは同じ生き物である以上、これは誰にでも関係があるものなのだ。逆にいえば、誰にでも関われる権利があるということ。こう言えば少し難しいところがあるが、純粹な笑顔を増やすことに反対する人はこの国に誰もいないだろう。一つでも笑顔を増やすために、多くの人にボランティアをしてほしい。それが私たちにできる復興である。一秒でも早く、一つでも多く、笑顔を増やす活動を皆さんに知ってもらいたい。

「被災地のグローバル化」

アメリカ合衆国 樹神 真美子「高校2年生」

震災から五年経った今、私は三ヶ月の高校に通っている。アメリカ人の方と触れ合う機会が多い私は、たまに海外の人々に聞かせる。実際の経験を話すと、みんな哑然としてしまうのである。私は東日本大震災を宮城県で経験した。私の中学校は沿岸部であったがぎりぎり津波から逃れられた。父が経営している病院も石巻市にあったが彼も私と同様逃れることができた。しかし、その日代休であった職員やそのご家族の方々が亡くなった。ライフラインも止まり当時私は、自分出来る事はないかと支援物資を必死に被災地に運ぶボランティアをした。日本

では、ニュース等で復興の状況を知ることができるがいざ海外でどのくらい震災及びその復興活動について聞いてみると皆無だということである。私一人の実体験でさえほとんどの人が耳を傾けて聞いてくれる。だから私は多くの方々に経験、及び震災からの東北の復興に対する努力の姿などを話すようにしている。昨年はサマーキャンプで出会った同年代の多国籍の外国人の人達や、旅先で出会った方々に、拙い英語で必死に伝える努力をした。サマーキャンプで私のルームメイトであったトルコの友人は、特に私の話を親身になって聞いてくれた。なぜなら彼女もトルコで地震を経験していて、恐ろしさなどを知っているからだ。その時思ったのは海外で私と同様、被災したことのある有志を集めて、将来復興プロジェクトを作り上げることだ。今はまだ、高校生であるためできる事は自分の拙い英語で世界中に被災したことのある有志を集めることしかない。しかし、今後日本に戻って大学に行つてさらに被災地に赴いて現状を知り、それを海外の有志及びアメリカの友人に発信したい。さらに日本では震災により被災地での人と人との関係が疎遠になり、コミュニティが衰退しているという話をよく耳にする。そこで私はふるさとコミュニティのためにできることとして、海外で同様に被災した町や市などとの交流の機会を設けるという活動を挙げる。大学在学中や卒業後、同じ被災した海外の有志達とお互いの国の復興への歩みなど復興に関する意見をふるさとに持ち帰り、今まで試みていなかった復興の方法を取り入れ迅速な復興への手助けをしたい。また、お互いの国の被災地の人達とお互いの特産物を送ったりして被災地同士で地球規模のコミュニティを作り上げられたらよいと思う。私のわずかばかりの努力や積み上げた知識や経験で私のふるさと東北を被災前より素晴らしいものにしてゆきたい。

「震災から生まれた新しいつながり」

宮城県 青木 純菜「高校3年生」

二〇一一年三月十一日、十四時四十六分、マグニチュード九・〇、最大震度七という沿岸を中心とした地震「東北地方太平洋沖地震」または「三・一一」と呼ばれる大きな災害が起きました。地震により電気と水が数日間途絶え、酷いところでは一週間以上もライフラインが復旧しない状態に不安と絶望でいっぱいの数週間を過ごしました。私の住む地域は内陸部だったため、被害も少なかつたものの、ラジオから聞こえてくる津波の被害を伝える声、何回も鳴る緊急地震警報、突如起こる強い余震は恐ろしく、この世の終わりを感ぜさせるものでした。さらには電気が復旧した数日後、テレビで見た映像はこれまでの衝撃を超えるものでした。津波が人や家屋、そして町全体を勢いよく飲み込んでいく様子には恐怖しか感じませんでした。津波の被害にあわれた人たちは、私の何百倍も怖い思いをし、絶望したことでしょう。

私が通う加美農業高校では被害が少なかつたものの、宮城県内にある学校ということで多方面からたくさんの支援と激励をいただきました。そのときのことを思い出すと本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ただ、同じ県内でも被害の大きかった沿岸部とは比較にならないほど恵まれた環境で生活できたので、被害を受けた方々のことを考えると、申し訳ないという気持ちと、私たちがやらなければならないことがたくさんあるはずだと感じました。そしてそこから震災通じての活動がスタートしました。

まずは被災地の状況を把握し、何が必要なのか、どんなことが求められているのか、自分たちの目で確認する必要があると感じました。そこで被害が大きかったとされる東松島を訪れました。その光景は震災以前とは異なり、建物がおとんどなくなり、辺り一面が見渡せるほどで、以前どんな風景だったのか思い出せないほどでした。家が建っていたことを思わせる残骸と、津波に耐えた数本の木、ぼろぼろになった校舎…。その風景は悲しく、涙が出そうでした。しかし、支援しようとする私たちがそんな弱気な思いではいけないと思い、これから復興のために私たちが元氣と希望を与えられる取り組みをしたいと考えました。その一つが仮設住宅への訪問です。私たちが育てた野菜を持って行き、食べていただくことで元気づけられればと考えました。その野菜を使って手料理を振る舞い、一緒に楽しく食事をしました。そのときに印象に強く残った出来事があります。

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|--|--|
| 高 | 校 | 生 | の | 部 | 入 | 選 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|--|--|

母と同じくらいの年代と思われる女性がいきました。交わす言葉は少ないけれど、私たちが調理や活動している際、ずと側にいて、やかに接してくれました。まるで母と一緒に食事の準備をしているひとききのようで、優しく温かい気持ちになりました。深くはお話することができませんでしたが、もしかするとお子さんを震災で亡くされて、私たちが我が子のように見ていたのかもしれない。仮設住宅の皆さんは、いろいろな面でも多くの被害にあわれたにもかかわらず、私たちを快く受け入れてくれたのだと、その時改めて感じることができました。また、たくさんの方々に「おいしい」、「ありがとう」と言ってもらえたことで、逆に私たちが元気をいただけた気がします。

二つ目の取り組みとして、被災した同じ年代の高校生と交流し力になりたいと考えました。そこで、東松島高校の生徒の皆さんと一緒に「コラボレーション」して復興の力になる企画を実施しました。東松島でとれた海苔と加美農業高校で作ったお米を使って、飾り巻きを作ろうというものです。「飾り巻き」は見た目も華やかで、人と人をまるくつなぐ縁起のよいものだと言われ、先生からお話を聞きました。講師の先生をお招きして、東松島高校の生徒の皆さんと一緒に作り方を教えていただき、楽しく会食しました。震災後、毎年の恒例行事となり、私たちの楽しみの一つとなっています。さらに、この取り組みを通して震災を忘れることなく伝えていきたいということから、現在では東松島町内にある小中学校などに出前講座として私たち加美農生が出向き、交流しています。

震災から五年。今では復興と同時に前に向かって進んでいる様子が、交流先での明るい雰囲気とたたくさんの笑顔から感じられるようになってきました。震災を通じて私たち自身も支援をうけることから始まり、ボランティアを通じて被災地の皆さんに元氣や勇気をいただき、たたくさんの交流から人と人との輪を広げることができました。震災は二度と起きたくはくはない、宝物です。「絆」という言葉は震災以前に耳にすることはあまりなかったけれど、絶つことのできない人と人との結びつきであると、震災からの体験で身をもって感じるようになりました。このような貴重な経験から生まれた新たなつながりは、今後とも絶えることはないし、今も私たちの心の支えになっています。またまた復興への道りは長いけれど、「絆」を大きく強く結んでいきながら、活氣あふれる社会を目指していきたいです。私たちがこれからの未来を担うものとして、「がんばっちゃ宮城、がんばる東北」を合い言葉に活動していこうと思います。

「『復興』から見える、私たちの東北」

岩手県 阿部 華帆「高校3年生」

二〇一一年三月十一日金曜日、全国の人はそれぞれどこ何をしていただろうか。きつといつものように、仕事をしていた人もいれば、お茶をする人、買い物をする人など一人ひとりいつもの日常を送っていたらう。当時小学六年の私は、六時間目の英語の授業を受けながらも明日のモトクロス練習のことを考えたりしていた。いつもの普通な金曜日のはずだった。十四時四十六分、大地震が発生した。私は、高台にある大槌高校まで全力で走ったことを今でも鮮明に覚えている。避難してから父とはその日の夜に、母とは翌日の朝に再会して、凍える寒さが吹き飛ばほどうれしかった。そして十二日の朝は、生まれて初めて「かんぱん」を食べた、ということさえはつきりと記憶の中に残っている。このように、「東日本大震災」というものは多くの人の記憶に刻まれているだろう。

私達に辛い記憶をもたらした大震災は、決して良い体験だったとは言えない。ただ、この体験を通して気づかされたことがいくつもあった。そしてその得たものは必ず大槌・東北の復興のカギとなると思う。

「復興」を進めていく中で、町を新たに直していく復興も確かに必要だが、私たちにとって最も重要な復興は、一人ひとりの内面の復興だと考える。震災の記憶を無駄にせず、考えや気持ちを切り換えていかななくてはならない。

「復興」とは、¹「復た興える」という意味である。ただし、震災前のあたり前に送られる生活に戻ることではなく、考えや気持ちを切り替え、生活できることに感謝をして復興を進めることだ。そこで、私達にできる、

最大の復興とは何だろうか、私が思う、今すべきことは、復興する未来の東北を支える力をつけることだと考える。それぞれの持っている将来の夢・目標に向けて今、全力で努力することこそ、復興の大きな原動力となるだろう。

私は現在、二つの目標に向かって日々過ごしている。一つは「モトクロスでレディスタンジョンになる」とこと、幼稚園教諭になる」という目標だ。五歳のうちから続けているモトクロスは、震災というブランクがあつても諦めず、今も練習やレースに励んでいる。また、幼稚園教諭になるため、勉強やピアノの練習も、モトクロスと両立させている。どちらの目標も、簡単には達成することはできないだろう。しかし、震災を経て、家族、先生、ボランティアの方々、たたくさんの人の支えで夢を叶えられる環境があるのだと再確認できた私達は、きつとどんな困難も乗り越え夢へ向かうことができるはずだ。したがって私は、この限られた時間を大切に使い、目標を達成していきたい。

今学生である私達が、それぞれ夢を叶え大人になった時、復興はどれほど進んでいるだろう。復興ができていてもいなくても、そこから大槌・東北を支え、栄えさせていく担い手は私達なのだ。そのために私は幼稚園教諭になる目的がある。それは、将来の新しい復興の希望となる子供達を育てることだ。震災を乗り越え、命の尊さや時間の大切さ、生活があること、すばらしさを実感した経験を、私達は持っている。その全てを使い、子供の成長の手助けと、大槌・東北の発展に力を注いでいきたい。

私が考える新しい東北の姿、それは「夢のあふれる明るい東北」だ。ありきたりに聞こえるかもしれない。だが、これが一番東北らしく、あるべき姿だと私は思う。夢に向かって一生懸命に努力していく姿は、東北の復興の大きな希望と力になるだろう。だからこそ、今私達の目の前にある勉強、部活、そしてその先の活動や仕事を全力でしなければならぬ。この全てが達成された東北は、復た興える、²「ことができた」とも意味するだろう。そして、そこから見える東北の姿は、きつと「夢のあふれる明るい東北」なのだ。

「被災地宮城から考える。

「故郷の今とこれから」

宮城県 太田 直希「高校3年生」

私は、被災地・宮城県仙台市の内陸部に住む高校生です。しかし実は、昨年の夏に初めて、津波被害を受けた沿岸部の被災地を訪れました。この経験を織り交ぜつつ、「震災被害から近くもあり、遠くもある」私が震災を通して感じたこと、伝えたいことを記します。

私は小学六年生の卒業間近に震災を体験しました。卒業式は予定よりも実施が遅れた上に、内容を短縮して行うことになりました。しかし、体育館で避難生活を送る被災者の方々が、お祝いの言葉や暖かい拍手を送って下さいました。辛い状況の中でも私たちの門出を笑顔で祝ってくれたことに、たいへん感動しました。

中学校に入学すると、生徒会の役員として「故郷復興プロジェクト」に携わりました。これは、仙台市内の小中学生が復興に向けて地域貢献活動を行う組織です。また、その活動内容を話し合う「故郷復興サミット」に参加した際は、同じ中学生が地元での復興について熱心に意見を述べ、議論を深める姿を頼もしく思いました。この会議をもとに実施した催しの中で、私が学生の力を特に強く感じたのは、七夕飾りの製作です。市内の小中学生一人ひとりが折り鶴を作り、それらを計39個の大きな七夕飾りとしてまとめ上げ、仙台七夕祭りで展示しました。ニュースでも取り上げていただき、学生の復興へ向けた熱意が集結した瞬間を、多くの方々に届けることができたと確信しています。

高校生になると、沿岸部の被災地に住む同級生に出会いました。私はそれらの被災地を自分の目で見たいという気持ちが強まり、昨年の夏に機会をいただいて宮城県の南三陸町・気仙沼市や、岩手県の陸前高田市などを訪れました。実際の風景と映像で見る風景はまるで印象が異なり、大きな衝撃を受けました。例えば、南三陸町の防災対策庁舎を目の当たりにしたときの驚きは、今も忘れられません。思い起こすと、テレビ越しに見ていた時は、「骨組みだけが残っているんだ。津波は恐ろしいな。」と感じるに留まっていた。しかし実際に、骨組みに絡みつくロープや、多数の塔婆・花束を見た時、この地で多くの命が失われたという現実を強く実感しました。それと同時に、自分の家から数十キロメートルしか離れていない地域の現状すら知らない自分を恥ずかしくも思いました。また、被災地の復興は今日も進んでいますが、被災者の方々が震災以前の生活を取り戻すためには、まだまだ出来ることがあると感じ、継続的な被災地への支援が必要であることも再認識しました。

では、私たち学生が今できる復興への支援とは一体何なのでしょう。支援というと、金銭的なものを思い浮かべがちですが、それは学生にとつて現実的ではありません。そこで私は、SNSを利用した支援を提案します。具体的に言うと、フェイスブックの「いいね」やツイッターの「お気に入り」を、被災地で頑張る方々の投稿に届けるというものです。私はツイッターを利用していますが、友人が自分の投稿に「お気に入り」を届けてくれると、嬉しい気分になります。目に見える全国からの応援の気持ちは、明日への活力となるでしょう。

また、全国の学生に被災地へ旅行に来て欲しいと思います。東北には、美しい景色・美味しい食事・暖かい人々が溢れています。ぜひ、東北を純粹に楽しんでください。多くの学生が東北へ足を運び、たくさん笑ってくれる。そんな若い力で溢れた東北ならば、復興へ向けたスピードは、ますます加速するはずです。

震災から五年を迎え、これからの被災地の復興を担うのは、私たち若い世代です。力を結集させ、被災地に活力を届け続けましょう。あの、七夕飾りのように。

「笑顔で繋がる新しい東北」

徳島県 岡澤 亜由奈「高校3年生」

私の考える「新しい東北の姿」は、家族や友人、地域の人々などが、笑顔で笑顔で繋がり合える日々を過ごしていることである。

高校二年生の冬、私は被災した方々の笑顔を少しでも取り戻したいという思いから、学校が開催する「復興支援事業」に参加した。この事業は、実際に被災地へ行き、災害の状況を視察したり、被災した方々から話を聞いたりすることで被災地の実態を知り、支援に繋げていく活動である。

私たちはまず、自分たちが製作した木製の遊具を本吉郡南三陸町にある保育所に届けた。遊具の製作中は、自分たちの手で作り上げた木馬や汽車、小さな屋台などで楽しそうに遊ぶ子どもたちの姿を想像しながら、早く届けたい思いでいっぱいだった。子どもたちの興味をひくような可愛い動物の形に、多様な色づけをしたり、子どもたちががをしないように角の尖りをなくして丸みを帯びさせたり、木材の組み合わせ方をよく考えて壊れないよう頑丈に補強したりといった工夫を重ねた。完成した遊具は「子どもたちに安全に楽しく遊んでほしい」という私たちの思いが込められた、世界に一つだけの遊具である。この遊具を十五時間以上かけてバスで、徳島県から宮城県の保育所に届けた。子どもたちは新しいたくさんの遊具に興味津々で、保育所の先生が「すごく遊びましょう」と発すると、一目散に遊具のところへと走って行った。私は、子どもたちに木馬の遊び方を教えたり、一緒にお店屋さんごっこをしたりして、とても楽しく遊んだ。子どもたちはみんなキラキラとしたとても輝かしい笑顔で、遊ぶことに夢中になって無邪気な姿を見せてくれた。子どもたちと交流を深めたあの時間は、私に大きな感動を与えてくれた。

ただ、子どもたちと遊んでいる中で、気になることが一つあった。女の子たちとお店屋さんごっこをしていたとき、一人の男の子がやって来て、まるで地震が起こったかのように、屋台をガタガタ揺らし、女の子たちを少し怒らせたことがあったのだ。ほんの瞬間の出来事だったので、その時は、男の子の単なるいたずらかなと思っていた。だが、次の日に訪れた東北大学で「子ども支援室」(Sチル)の方々による、子どもたちの心理についての講演を聞いてあの男の子の心の奥にある闇に気がついた。東日本大震災を目の当たりにしたり、メディアによる震災映像を繰り返し見たりした幼い子どもたちは、その恐怖や不安を言葉にして表すことができず、地震や津波を再現して遊ぶことにより大人たちに、自分は今の悲劇を思い出して怯えているのだと伝えている子がいるというのだ。あの男の子は、まさしくそうだったのかもしれない。そして、あの時私に何かを伝えたかったのかもしれない。

子どもたちを笑顔にするためには、楽しませてあげようという一方的な思いだけでは足りないのだ。子どもだけでなく、人間の行動の裏には、「喜び」「悲しみ」「不安」「恐怖」など、表面上には表れない感情が必ず存在する。そうした心の声を傾け、向き合うことが大切だ。被災者の心のケアという点でアクティビティやカウンセリングやグループワークといったことの重要性も現在叫ばれている。被災者の話を聞き、その感情を受け止め、共感することによって、「ちゃんと聞いてくれているんだ」「話がしやすくして落ちつく」という安心感を持つてもらえる。ただ、人によっては何も話したくない時もあるだろう。そんな時は、ただそばにいて一緒に活動するだけでもいいかもしれない。こういことを積み重ねていくことで本当の笑顔が生まれ広がり、笑顔と笑顔で繋がり合える新しい東北へと繋がっていくと思う。

今年の冬も、私は手づくりの遊具を持って東北に行く。もし、あの時と同じような男の子と出会ったら、そっとそばにかけ寄り「大丈夫だよ」と声をかけ、抱きしめるような気持ちで包み込んであげたい。それが、笑顔で繋がり合える新しい東北への第一歩になるはずだ。

「未来の東北」

岩手県 小野 紗友梨「高校3年生」

二〇一一年三月十一日、午後二時四十六分、東日本大震災が発生した。私は当時小学校六年生だった。卒業式を間近に控えていたため音楽室で卒業式の合唱練習をしていた。いつものように時間がゆくりと平和に流れていく。そんなやさきにあの悲劇は襲ってきた。最初は普段私たちが体験しているような地震ですぐに揺れがおさまると思っていた。しかし、あの日は違っていた。何分たっても揺れがおさまらない。むしろどんどん大きくなっていく。私たちの中には不安と恐怖で泣きだす人もいた。私は高台にある祖母の家へと避難した。家は大槌で最も高い山である城山のすぐ

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|--|--|
| 高 | 校 | 生 | の | 部 | 入 | 選 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|--|--|

近くにあって。余震が怖くてしばらく外に出ていた。すると道路の向こう側を真っ黒い波が勢いよく大槌町を飲み込んでいた。私は驚き、無我夢中で城山へかけ上がった。そして頂上で目にしたのは変わり果てた町の姿だった。あの日から長くて辛い避難生活が始まった。食料も水も電気もない生活だった。避難している間は全国の方々からたくさんのお洋服や食料を支援してもらった。名前も顔も知らない人たちのためにたくさんのお金が動いてくれている。そんな姿に感動し、大きく変わった「ありがたう。」を伝えたいと当時小さかった私はぼんやりと思っていた。

あれから四年。私は復興活動に力を入れていた大槌高校に入学した。主に部活動を通し復興活動に参加した。特に印象に残っているのは他校とのワークショップである。時間がたつにつれ忘れていた震災の記憶や教訓を思い出させてくれる意義深い活動だった。相手の高校生も私たちの目を見て真剣に話を聞いてくれていたし、それに対してアドバイスを積極的にしてくれた。二時間という短い時間の中だったが参加した全員が笑顔になり見知らぬ高校生どうしが震災を通し固い絆で結ばれた。震災は私たちにとつて辛く忘れてしまいたいという気持ちになるけれどそれだけでなく、このように震災を通して生まれる絆もあるということを知ってほしい。また大槌高校では生徒会の生徒が支援してくれている学校に直接訪問し、現在の大槌町の復興の状況や学校の様子を伝えている。この活動は東北全体にも応用できるのではないかと考える。相手に状況を知らせることでやりがいや満足感を感じてもらえると思う。これが私たちなりの恩返しではないだろうか。例えば相手に状況を伝えることで新たな提案や支援を受けることだってできるかもしれない。

伝える手段はなんでもいい。私は手紙も一つの良い考えであると思う。大人だけでなく、子どもにだって書くことができる。これからは自身の姿勢でなく、自分たち自身が伝える発信していくことが必要である。ひとりひとりがアクションを起こすことで受身だけではない新たな東北を切り開いていくことができると期待している。私も将来は大槌町の復興に携わりたい。ひとりひとりの力が大きな力となり東北が復興していくことを願っている。

「これからの東北のために」

福島県 鋪木 透也 「高校3年生」

二〇一一年三月十一日。多くの人の何気ない日常は、あの震災と共に奪われてしまいました。当時小学生だった私は地震が起きた時学校で授業を受けていました。大きな揺れにニククになる友達や先生とは逆に、私はなにが起ころうのか理解できず冷静に行動していたことを覚えています。家に帰るといつも仕事で夜まで帰ってこない母が帰ってきていました。そしてずっと余震が続いていたため家から避難することになり、その日は車で夜を過ごしました。丁度その時のラジオで原発のことを話していて「ここでやっと私は、もしかしたらこのまま死ぬのかもしれないと思いました。あれから五年が経ちました。時の経過とともに、日常を取り戻すことができている人も多い反面、まだまだ困難な状況の人もたくさんいると聞きます。」

実際復興は進んでいて、多くのガレキが処理され、道路や施設なども復旧し、住まいの移行なども始まっているそうです。多くの人の協力ですべてのことだと思っています。

では私には、これからの東北のためになにができるのでしょうか。一人では大きな復興はできないと思います。そこで私なりに考えたことは、地元に残ることです。地元に残り、地元で就職をして、地元の人々のために働くこと。そしてもしも結婚して子どもができたのなら子どもにもこの体験を伝えること。これが私にできる小さな復興だと考えています。きっと私と近い歳の人は、大人になれば東北から出ていく人が多いと思います。しかし人が少なくなってしまうと、それこそ東北に明るい未来はないと思います。そこで地元に残り自分の周りの人だけでも笑顔にしたいです。また私はいじめなおじいちゃんから戦争の話が聞かされ、とても怖く戦争はやってはいけない事だと小さい時に思うことができました。だから私もこれから生まれてくる命たちに地震、津波の恐ろしさを伝えるこの記憶、体験を子どもにも知ってもらいたいです。同時に私も話をする度にこのなげない日常のありがたさ

を忘れないようにしたいです。

大きなこと、多くのことはできないけれど私にできることがあれば進んで行動しようと思っています。まずは自分の周りの人、環境から。ここからが私の復興の始まりです。

「問う&訪う&to東北！」

秋田県 後藤 ゆうひ 「高校3年生」

1 問う 南相馬市小高区川房、母の故郷。東には太平洋、西には阿武隈山地。

牧草が海苔巻きのようにパックされている傍らで、牛や馬が美味い餌になるのを待っていた。

村長だった高祖父が身銭を切って導入したという牧草地に積まれている黒いロールバック、餌の代わりに、除染土が入るようになって五年。

遊びに行くとたび声を掛けてくれた人たちは今どうしてるのだろう。

2 訪う 一時帰宅が許され、荒廃した家を見た時、姉と私は誓った。

ここに住んで祖父の家を再建する。

そのためには？と考えると、姉は医学の道に、私は法学の道に進んで復興のリーダーを目指すことにした。

危険を顧みず、廃炉や除染に携わって下さっている尊い作業員の皆さん。被災者でもある行政職の皆さん。

いろんな形の社会貢献はあるけれど、ある程度の地位や知識があれば付いて来てくれる仲間が増えるのではと考えた。

3 to 東北 私の家に避難した人たちと一年間暮らした経験から実感したこと。それは「刀で受けた傷は治せるけど、言葉の傷は治せない」と言うこと。

県外に避難した人を卑怯者、県内に残る人を愚か者と、批判して悦に入る人たちが、どんなに復興を邪魔していることか。

寄付も労働力も提供しないなら、せめて「当事者が決めたことを邪魔しない」という支援をすればいいのに。

そして心あるならば東北を訪れて、食べ、買い、家に帰って東北の人らは前向きだったと語ってほしい。

私たちは故郷を失くした可哀想な人じゃない。未来をリフォームできる一番近い位置にいるデザイナーなのだ。

京都が暮盤の目のように整備されて都の伝統を誇っているように、東北もまた整備しやすい地形をしていると考えられないだろうか。

レッツゴーto東北！住む人も応援する人も、真新しい故郷さえデザインできることを信じて、夢と誇りを持って進みたい。

【福島ゆ うち出でて見れば 真白なる 未来のキャンパス 画家を待ちたる】（山部赤人さん&ゆうひ）

【桃食めば東北思ほゆ 鮭食めばまして徳はゆ いづくより来たりしものぞ まなかひにもとなかかりて やすいしなまぬ】（山上憶良さん&ゆうひ）

「本当に求めていること」

愛知県 野沢 若那 「高校3年生」

震災から五年が経ちました。節目の年という事もあり今年、新聞やテレビ、ラジオなど様々なメディアから東日本大震災について目にする機会が多かったように感じています。その中で私はあるテレビ特集を見ました。それは岩手県陸前高田市に住む女性がインタビューにて震災に關する今の自分の思いを語っている姿でした。それは、私の今まで行っていた行動を見つめ直すきっかけとなりました。「都会の人たちが口を揃えて言う「被災地との絆を大切に、震災を風化させない。」という言葉。私たちが求めているのは「そうじゃない。」という厳しい言葉でした。

私は、愛知県に住む高校生で、ユネスコクラブという部活に所属しています。これまで私は活動の中で、岩手県陸前高田市の特産品である「米崎りんご」を使用した復興応援アイス「希望のはちみつりんご」の販売を行ってきました。学校の校舎屋上でミツバチを飼育していることから、ここで採れたはちみつと、陸前高田のりんごを使用したアイスクリームを私たちの先輩方が開発し、今では先輩方の思いを引き継いで販売を継続しています。私たちは販売開始当初から、アイスを紹介する枕詞に「復興応援ご当地アイス」や「名古屋と陸前高田を繋ぐ絆のアイス」とお客様に伝えていました。

その中で今年、私はあのテレビ特集を目にしたのです。それまで私は、現地の方のために、現地の方の思いを「名古屋で多くの人に伝えたい」と思い一生懸命頑張っていたつもりでした。ですがそれは、現地の方と私たちに気持ちのズレがある、それはただの私の自己満足だったのかもしれない。と気づきました。震災から五年が経っている今、現地の方のかもしれない、でもこれからはまた違った発信の仕方でも販売をしなければいけないと感じ新たなアプローチを模索するようになりました。そこで私は考えました。それは「自分がお客様に本当に伝えたいことは何か」という事です。実際に現地に訪問したメンバーから話を聞いているうちに私の中の答えが見えてきたように感じます。それは「陸前高田本来の魅力を伝えたい」という事です。震災、津波ではなく、その街の良さや魅力、人々の温かさをお客様に伝えたいと思いました。「震災を忘れない」ではなく「震災を乗り越えたからこそ今ここに あるもの」、これからは震災の被害を受けてしまった街という悲しい目ではなく、今の陸前高田の復興への活気あふれる前向きな思いや、魅力を発信していくことが大切なのではないかと考えています。

これからの東北。必要なのは、私は「こんな素晴らしい街から生み出された○○」を発信していく事だと考えています。元あった姿も街の魅力であり、震災を乗り越えてきた新たな魅力もその街の良さです。そのことを踏まえて、これから活動を展開していくうえで、一歩外から自分たちを見たときに本当に現地のためになるのかという事を客観的に見ていく事に加え、現地の方に思いを直接聞くことができないにしても常にアンテナを張り最新の情報を取り入れていくことが今後、私たちがしていかなければならない事だと考えています。

「私たちが考える『新しい東北』の姿」

福島県 早川 真由子 「高校3年生」

私たちが小学六年の五年前に東日本大震災が発生しました。震度七の大きな地震で学校の天井の一部が落ちてきたり、家の家具が倒れていたり、余震が続いてとても恐い体験でした。また、海岸付近の地域は津波の影響で家が流されたり、原発事故が起きて避難生活を送っている人がいます。しかし、原発事故の影響で避難区域となっていた地域も五年たった現在は解除され、地元の幼稚園や小学校に通っている人も多くいます。でも、まだ復興の途中だと思っています。

私はこれからの東北は、地域の人たちと気軽にコミュニケーションをとり、東北の良いところを多くの人たちにアピールすべきだと思います。現在は地域の人たちとコミュニケーションをとる機会が少なく、自分の地元なのに分からないことが多くあります。また、地域の人たちの考えを聞くこともありません。

私がこのように感じたのは、地域のボランティア活動に参加したことがきっかけです。田村市復興応援隊という団体のボランティア活動で震災後初めて直接地域の人たちの声を聞くことができました。それまでは、自分が考えもしなかった復興に向けての話、地域をより良くするための話を聞くことができました。私は、避難していた人たちが戻って来ただけかと思いましたが、移住女子といって震災後に県外から来た人たちもいるということを地域の人たちと知ることができました。このように自分の知らないことが、イベントがきっかけで知ることができました。このように自分の知らないことが、地域の人たちとコミュニケーションをとることによって発見できるので、これからは積極的に地域の人たちとコミュニケーションをとるべきだと思います。

また、東北の良いところもたくさんアピールするべきだと思います。東北は震災の被害に遭い、多くの人たちや多くの地域が被災しました。しかし、震災から五年が経過し、以前のように観光客が多く訪れる地域もあります。このように、東北は良いところがたくさんあり復興も進んでいるということを多くの人たちにアピールするべきだと思います。

東北の良いところ、復興しているところをアピールするためにも、これからの東北は地域の人たちと気軽にコミュニケーションがとれるところになります。今後は、私たちが積極的に地域の人たちとコミュニケーションをとるために、ボランティア活動に参加したり、地域のイベントに参加したりするべきだと思います。そして、より良い地域になるといいです。

「私たちにできること」

福島県 松枝 未佳 「高校3年生」

二〇一一年三月十一日、私は当時小学六年生でした。卒業間近で、残りわずかな学校生活を楽しんでいる時、恐怖は突然やってきました。給食を食べ終え、六校時目。あれはクラスで学活をしているときでした。初めはただの地震で、私はすぐにおさまるだろうと思っていました。しかし、なかなか揺れはおさまりません。その時、今まで体験したことのない揺れと地鳴りを全身で感じ取りました。足元から背中を通り体全身に寒気を感じました。その時の私には「恐怖」その言葉しかありませんでした。クラスの中には泣いている子もいました。私はその子の背中をさすり「大丈夫」と言葉を掛けることしかできませんでした。「大丈夫、大丈夫……」その言葉はきっと自分にも言い聞かせていたのかもしれない。

家に帰ってテレビを見てみると、画面には海岸からさらなる恐怖が迫っている様子が映っていました。車で逃げようとする人。しかし、その車も海の藻屑と消えてしまいました。私はその光景を今でもしつかりと覚えています。突如起きた二つの自然災害により多くの方が亡くなりました。しかし、災害はこれだけでは留まらず、福島第一原子力発電所の爆発が起きました。私の住む地域にも災害が及び、避難することを余儀なくされました。避難場所は、あづま総合体育館。中には多くの人がいました。冷たく硬い床に支援された毛布を敷き、不安を抱えながら一夜を過しました。翌日、支援された食事は、ビンポン球ぐらいの小さなおにぎりでした。不安が募る中、すぐに帰れると思っていた体育館での避難生活は三週間にも及びました。その生活の中で、衣類の提供や炊き出し等の地域の方々の善意を感じました。

あれから約五年、月日は流れ私は高校生活最後の年を迎えます。そんなある日、私は地域医療を支えた奥秋盛美さんが映っているテレビを見ました。幼い頃からお世話になっていた奥秋さんが医師を引退するという内容でした。その内容を知り私は、驚きと疑問を持ちました。

その疑問とは、これから村の医療を誰が担っていくのかということです。医師が不足している今、避難解除方針が出されていても、医療機関の整備が整っていないのであれば、帰還する人もいないと私は思いました。

私の姉は看護師、兄は建築士を目指しています。それぞれが復興に関わりのある職業です。私はそんな兄弟の姿を見て「私たちにできる復興」考えた時、将来地元で活躍できるようにすること、役に立つことが復興であることに気づきました。

私の夢は管理栄養士になることです。一見復興と関わりが無いように思われますが、これからの福島の食にも関わると私は思います。全国には、

| | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|--|--|
| 高 | 校 | 生 | の | 部 | 入 | 選 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|--|--|

まだ福島のご飯物に対して安心できない、と言う人もいます。そこで私は、福島のご飯物が安全であると言ったことをより多くの人に知ってもらいたいと思いました。そのためには、管理栄養士となり、福島のご飯を伝えるべきだと思います。そして、少しでも地元へ貢献できればと思います。これから若い世代の人達が自分ができる復興を考え、行動していけば、新しい東北の姿が見えてくるかもしれません。

「私たちにできる復興」

福島県 宗像樹「高校3年生」

「野球でみんなを笑顔にする。」
私は小学六年生の時に東日本大震災を経験しました。そして中学校に入学する時にこの言葉を胸に野球部に入りました。今まで当たり前のようにできていた野球が当たり前でなくなりました。私はとても悲しかったのを今でも覚えています。

私はできるだけ復興に力を注ぎたいと考えています。しかし、正直なところお金で施設を作ったり、防波堤を作ったりすることはできません。だから私は、今自分が一番頑張っている野球で被災者の方々の心の復興をしたいと考えています。被災者の方々の中には家を失ったり、家族、友人を亡くした方々もたくさんいると思います。そして今でもその悲しみを抱いて生活をしている人がたくさんいると思います。その方々を何としても笑顔にしたい。私はこの思いを持ち続けています。

では、どうやって笑顔にするかという話になりますが、それは簡単です。私たちが船引高校野球部が福島県大会で優勝して、甲子園に行くこと。今年、九年連続で甲子園に出場している聖光学院が今年も甲子園に行ってもつまらないと思います。ですが、私達が甲子園に行ったら福島県民の方々はどう思うでしょうか。みんなわくわくして笑顔になると思いませんか。県大会に行くのが精一杯だったチームが奇跡を起こすのです。そしてその夢に本気になって向かっている自分たちのプレーを見てもっと元気になるてもらいたいです。私たちは人を感動させたり、笑顔にできたり、そういう能力を持った集団です。かならず私たちが福島県、そして東北を明るく元気にさせます。

私自身は将来、消防士になって福島県の復興、保安に直接関わっていきたいと思います。最初は宮城の大学に行く学校の先生になるという夢を持っていましたが、私が深く考えた時に、自分をこまごま育ててくれた福島を離れるわけにはいかないと決心し、福島に残つてこれからは福島を見守り続け、自分の長所を生かすには消防士にかなわないと思いました。消防士になっても人を笑顔にすることを忘れず復興に携わっていきたくと思います。自分自身やつばり人の笑顔を見るのが大好きです。だから田村市をもっともっと元気で明るい町にしていきたいと思っています。

最後になりますが、福島県はまだ放射線や原発事故などの風評被害によつてあまりいいイメージを持たれてない方がたくさんいると思いますが、そんな風評被害をおとぼけするくらい、明るいイメージを全国に届けられるように、これからの毎日を大切に、精一杯努力していきたいです。

「元氣な日本を取り戻すために」

福島県 箭内鈴佳「高校3年生」

小学六年生の私は、担任の先生の冗談交じりの話が大好きだった。平成二十三年、三月十一日いつものように皆で先生の話を聞いて笑っていた。そんな時、教室が大きく揺れ、楽しかった雰囲気は一変した。

「みんな！落ちて着いて！机の下に隠れて！」いつも明るく笑っている先生が真面目な顔でそう言った。その後、揺れは激しくなる一方で、皆と一緒に階段を降り、上履きのまま外へ出た。すると急に雪が降ってきた。私は怖くてしがみこんで泣いてしまった。その時、私は初めて雪が怖いと思った。

震災前に、寒い体育館でたくさん練習した卒業式が中止になったと知らされ、先生たちを責めてしまった事。今でも心残り、で、ただけ自分の事しか考えなかったのだらうかと後悔している。震災後、親や先生方のおかげで、小学校の小さな食堂で卒業式を挙行することができた。皆で小学校を卒業できた事、本当に嬉しかった。もしあの日の震災がなかったら、当たり

前の日常がどれだけ大切な日常かを知る事ができなかったのかも。知らない。

震災後、心が折れそうな事もあった。テレビで津波の映像が流れているのを見るのが嫌で、テレビを見る事さえ怖くなった。自分自身が弱っていくの身に染みて感じた。それと共に、震災で経験した事が私の生きるエネルギーになった。今日も精一杯生きよう。そう思わせてくれる経験になった。家族や友達、同じ経験をした人々との絆が深まった。そして何より命の重さを知る事ができた。一人の命を救う為に何人も人が人命救助に携わっている事に感動した。テレビの中だけで起きている事のように思えなかった。なぜなら、自分自身も同じ揺れを経験し、同じ思いをしたからである。

私は昔から、青年海外協力隊やNPOなどのボランティア活動に興味があった。しかし、いつかそんな活動ができたらな、という軽い気持ちでしかなかったのかもしれない。そんな中、震災が起き、身近に被害に遭っている人々がいて、人の力になる仕事に就きたいという気持ちは大きくなり、将来の事を真剣に考えるようになった。私は医療関係の仕事がしたいと思う。病院にやってくる人のほとんどが暗い表情だ。しかし、助けてあげたいと思う人に一声掛けるだけで笑顔を取り戻してあげられる。まずは心から人を元気にする人間になりたい。

少しでも早く元氣な日本を取り戻せるように、私も復興への力となる事を目標とし、立派な社会人になりたいと思う。復興への近道は無いかもしれないが、日々の復興へと近づこうという私達、日本人の気持ちの積み重ねこそが大事なのだと思う。

「新しい東北」

福島県 渡辺 希和「高校3年生」

震災から五年の月日が経った今、東北は新しく復興したのでしょか。私は、震災当時小学校六年生でした。けたたましい地鳴りが聞こえた次の瞬間には、周りの景色が揺れていました。避難し、一段落ついた時、私が思ったことは卒業式ができるかどうかということでした。卒業後、引越して控えていた当時の私にとつてそれ以外別れを惜しむ機会はありませんでした。しかし、卒業式は中止となり、一人の寂し式に成り果てました。

私はあとのくらの月日が経てば、いつも通りの日々を過ごせるのかということをよく考えていました。引越して先は避難区域に指定されており、どこへ行けば良いかわからない毎日でした。そんな中の唯一の楽しみは、家族と遠い未来何をするか話し合うことでした。都路に帰れたら、皆で稲の苗を植えよう。地元の祭りに行こう。桜が綺麗な富岡の夜ノ森でお花見をしよう。近い未来に想いを馳せることで、辛い時間もそのために必要な準備期間と思えるようになりました。

そして我が家が避難区域から解除された翌年、私たちは家族で田植えをしました。四世帯という大家族で植える仕事は楽しく、希望に満ちていました。地元の人たちも多く帰つて来てくれたことで、祭りも再開されました。太鼓を叩いて、くじを引いて、新たに私の故郷である都路の良さを感じる事ができました。

あの頃、皆で描いた未来は一つずつ叶っています。それは稲の苗を自分たちの田んぼに植えること、遠方に避難した地元の人々が帰還し区ごとのお祭りを盛大に行えること、何年後だろうなと少し諦めながら考えていたことも、この五年の間に実現しています。新しい東北は、今まで通りの暮らしに少しだけの有り難みを加えたものでした。大きな施設や、デパートが建設されることも大切な復興です。しかし、元に戻す、それが一番の尊い復興の形だと思えます。元に戻すことを一番感じるのは、現状をひとつの景色として捉えたときに生じる気持ちだと思います。田畑、地元の人々の話し声、野菜の直売所などを見たとき、見たことあるという既視感が伴っていること。それこそが、元に戻たということだと思います。また誰にも見せられない温かみをこれらの東北に加えていきます。

まだ叶っていないものがあります。それは夜ノ森でのお花見です。現在をただ通り抜けていくことは可能ですが、立ち止まることはできません。五年でここまで近づいた未来はあと何年で実現するのか。新しい東北は、幼い頃の私が考えている以上に、早く、美しくかたどられていきます。震災から五年の月日が経った今、東北は震災前を抱きながらも、新しい有り難みと温かさで復興しています。